



ippeki

キャンパス通信 第5号/2013年4月-2013年9月

C O N T E N T S

- 01 学長・学生対談企画
- 03 授業紹介
- 05 4年生 最後の病院実習
- 07 キャンパス日記
- 08 INTERNATIONAL ACTIVITIES
- 09 看護部長からのメッセージ
- 10 研究室訪問

ひとりを看る目、その目を世界へ。



日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

# 浦田喜久子新学長を囲み、

## 平成25年度3年次特待生の大田さんと江上さんがお話を伺いました。

日赤本社看護部長として  
赤十字病院のキャリア教育を  
全国的に導入

江上さん 最初に、この緑豊かな宗像市にある本学に着任され数ヶ月が過ぎましたが、どのような印象を持たれていましたか？

浦田学長 これまで何度か大学行事などにお招きいただいて足を運んだことがありますが、自然あふれる美しい環境だと思っていました。あらためて宗像市に住むことになって、空気がおいしく緑もきれいで、魚などの食材も本当においしいと感じています。今の住まいからは、駅やスーパーも近く、便利で住み良い街だと思います。

大田さん これまでは、どのようなお仕事をされていたのですか？

浦田学長 東京にある日本赤十字社（以下、日赤）の本社で看護部長を務めていました。日赤が有する92病院、18看護専門学校・助産師学校、6大学の全体を統括するような業務に携わっていました。

病院、看護教育施設と連携を図って、全体的な計画を決めて進めていく仕事で

す。それから、世界の赤十字の中で、日赤がどのような取り組みを行うか、海外の赤十字関連機関と調整して進めていくような仕事も行ってました。

大田さん 先日、「看護とリスクマネジメント」の授業で、現在、赤十字病院で取り入れられているキャリア開発のための教育システム(ラダー)を、浦田学長が導入されたと伺ったのですが。

浦田学長 日赤本社の看護部長就任前、アメリカでキャリア開発の実践について研究しました。これからの日本の看護師のキャリアアップには有意義だと確信があり、是非、赤十字病院に取り入れたいと思いました。実際に、日本の看護の現場に取り入れるための準備に3年くらいかかりました。それから、そのシステムが動き始めて定着するのに3年かかりました。関わったスタッフのおかげもあり、今は、全国の

赤十字病院で働く看護師の教育システムとして活用されています。

### 看護師の葛藤を

### 目の当たりにした臨床時代

### 自身の病床で

### 患者さんから励まされる

江上さん これまで看護の実践の中で、一番苦労されたことは、どんなことですか。

浦田学長 苦労した点とか難しいと感じたことですが、私がまだ病棟の看護師をしていた頃は、「がん」を患者さん本人に告知していなかった。

自分ではがんなんじゃないかと周囲を疑いながら過ごす患者さんとの日々。もどかしい思いをしながらのケアは、本当の癒しになっていないのではないかと葛藤がありました。キューブラー・ロスの著書『死ぬ瞬間』でも示しているように、患者さんは「死」を受け入れていくプロセスをたどっていく。それを目の当たりにしながら、看護師にはどうしようも

できないジレンマがありました。当時は、国内だけでなく海外の病院でも同じ状況でした。たとえばアメリカでは、看護師がかかえるジレンマを大声で吐き出せるよう「叫びの間」という部屋が用意されていたくらい。それくらいみんな葛藤を抱えながらケアしていたんですね。

大田さん 自分が不安や恐怖、ジレンマを抱えながら患者さんに向き合うことは、看護師としても辛い状況ですね。逆に、良かったと思われたことについて教えてください。

浦田学長 それは本当に色々あるのですが(笑)。看護師は、日々、患者さんからの励ましをもらっていると感じます。私は、自分が大病してベッドで苦しんでいるとき、これまで接した患者さんの顔が一人ひとり思い起こされて、本当に励まされました。不思議な体験ですが、私た



3年生 大田 彩加さん  
広島県・福山誠之館高校出身

ち看護者も患者さんに生かされている、看護させていただいている、とひしひしと感じた瞬間でした。

今できることを

精いっぱいやる

それが看護師として必要な

「力」になってくる

江上さん 3年生の私たちは、学生生活が残り1年半になりました。いま、私たちが身に付けておくべき力はどのようなものがあるでしょうか。

浦田学長 高齢社会を迎え、看護が非常に多様化しています。いまは、方法、体制、概念そのものが大きく変わる時代。いま覚えたことが、今後の実践でそのまま役に立たない場面も増えるかもしれません。そんな状況で求められるのは、思考し、判断し、実行していく力です。単なる知識や経験を、最善の策に変えていくことが必要です。特に人間を対象としている看護は、相手と向き合うために自



3年生 江上 優人さん  
福岡県 宗像高校出身



分自身を自立(自律)させなければ継続は難しい。人の生や死にかかわる看護師は、一生かけて、人間の幅広さや深さを学んでいくものです。それを学ぶための力や探究する方法を、大学時代に身に付けてほしいと思います。それが、社会に出たときに本当の力になる、と私は思います。逆にお二人に質問ですが、大学で修めておかないといけない、と思うことは何だと思えますか？

大田さん 正直、目の前の課題に追われてしまつて大事なことが何だつたか忘れてしまひそうになります。ただ、実習で向き合った患者さんを思い出しながら、「患者さんのために」ということを忘れないよう日々心がけています。

浦田学長 「向き合う」ということは、とても大事なことです。相手に真剣に向き合う自分、その自分に対して向き合うこと。そこから多くのことが見えてきます。看護において基本的で一番大事な姿勢だともいえます。とても良い学び

をしていますね。

江上さん 私は、将来、人のいのちに接する仕事をするんだ、という責任のよくなものを感じています。日々の学習だけでなく大学行事なども、責任感を持つて自分を励ましなが取り組んでいます。自分は負けず嫌いなところもあるので(笑)。

浦田学長 看護は、ファイトや根性が求められる場面も多いですから、負けず嫌いは良い面もありますよ！ 2人とも良い学びをしていますね。お二人が学んでいることは、変化の中で発揮すべき力を身に付けるための大事なプロセスです。社会に出たとき、学生時代に必死になつてやったことが必ず自分に返ってくる。時間がある今だからこそ、本を読んだり、レポートを書いたり、ボランティアしたり：精いっぱい取り組んでほしいと思います。

大田さん 最後の質問ですが、私たち看護学生や新人看護師が抱える悩みについて教えてください。臨床に出ると「自分は看護に向いていないかもしれない」と思う場面に、看護にかかわる多くの若者が遭遇しています。患者さんに向き合っていること、自分を律し続けることは、やさしいことではないと思います。そんな看護の仕事を通じてこられた浦田学長のパワーはどこから湧いてくるのですか。

浦田学長 看護師は専門職なので、自分の看護のスキルや看護観を高めていき

いと思いつけてきました。特に、患者さんと接してケアをすると、今でも自分の未熟さや足りないものを感じます。学生の皆さんも実習にでるときとそう感じるのでしよう。今より良いケアをしたいという思いは尽きません。この探究心のよくなものが、いわゆるパワーになつてい

るかもしれませんね。  
大田さん・江上さん 今日、貴重なお話がたくさん聞きました。ありがとうございます。



浦田 喜久子学長  
うらた きくこ

福岡赤十字高等看護学院(本学の前身)卒業後、熊本赤十字病院入職。平成4年に同院看護部長就任。

その間、日本赤十字中央女子短期大学他で教鞭を執る一方、青山学院大学他にて学位取得。平成15年4月から10年間、日本赤十字社事業局看護部長を務める。  
現、学校法人日本赤十字学園理事、日本赤十字社看護師同方会 理事長。

## 福岡県

### たくさんの人の思いと行動がかたちになる献血と血液事業

訪問施設：福岡県赤十字血液センター  
北九州事業所



街頭献血の様子

福岡県赤十字血液センター北九州事業所と、赤間コミュニティセンターでの街頭献血を訪問しました。血液センターでは、職員の方からの説明後、施設見学をしました。街頭献血では、受付や献血バスの中の様子を見学しました。献血された血液が医療機関に運ばれるまでには、様々な人の手で多くの過程が踏まれており、効率性や安全性、献血者の健康を配慮する行動や仕組みがあり、血液事業は「人道」の理念に基づいて行われていると感じました。献血する方も職員の方も「誰かのために」という思いを持っていることが分かったからです。赤十字の大学で学んでいる私達もこうした思いを忘れず勉強に励みたいと思いました。

志賀 友佳さん 福岡県・明善高校出身

## 福岡県

### 気づく態度を養う「青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター」

青少年赤十字について学ぶため、夜須高原で行われた日赤県支部主催「青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)」に参加しました。このトレセンは、2泊3日で中高生が「気づくこと」を心がけて一緒に生活する研修です。私たちは、小学生を対象に、止血の応急手当や、人工呼吸と胸骨圧迫(心肺蘇生法)の指導をしました。教えることは難しかったですが、熱心に話を聞いてくれる態度に、こちらが驚かされました。赤十字の看護学生として、赤十字がどのような活動をしているのか、どのような理念を持っているのかなど、小学生に伝えることができ、いい経験になりました。

下條 愛理咲さん 福岡県・中村学園女子高校出身

訪問施設：日本赤十字社福岡県支部



小学生の心肺蘇生訓練

## 熊本県

### 「相手を助けるだけがゴールではない」赤十字の存在の大きさ

訪問施設：熊本赤十字病院



病院屋上のドクターヘリポート

日本赤十字社の国際医療救援拠点病院の一つである熊本赤十字病院に行きました。屋上のドクターヘリや災害医療活動の専用車両を見学しました。さらに、国際赤十字の救護チームが使う膨大な機材が専用倉庫に整理され、いつでも使えるように管理されていたことに感動しました。国際赤十字の救護チームとして行かれた医師や事務の方とお話をさせて頂き、赤十字の7原則である「人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性」に則って、相手を助けるだけがゴールではなく、今後の生活も考えることが大切だとわかりました。赤十字の存在の大きさを改めて実感し、医療の対象が人であり、国際に携わることの難しさを知りました。

水田 優佑さん 佐賀県・鳥栖高校出身

## 沖縄県

### 「人道」の心で一人ひとりに向かい合う看護が提供されていた!

離島があり、災害の多い沖縄での地域医療の連携と、迅速な災害救護を学び、それらの活動と赤十字理念との関連性を調べるため、沖縄赤十字病院を訪問しました。地域医療連携室を設置し、病院と地域との連携を強化するためにシステム化されており、患者さんの受け入れだけではなく、退院時の地域担当医や社会福祉サービスとの連携が重要視されていました。退院後の生活や必要な支援を提供することの大切さと、地域医療との連携の必要性を学ぶと共に、赤十字の理念である「人道」の心をもって、患者さん一人ひとりと向かい合うことが大切だと感じました。

荷川取 夕那さん 沖縄県・向陽高校出身

訪問施設：沖縄赤十字病院



救護用医療セットの説明

# 1年生

## 赤十字ってなあに?

### キャンパスを飛び出して赤十字の活動を知ろう

「赤十字活動」の一環として、全国の赤十字施設でフィールドワークを行いました。この科目は選択科目にもかかわらず、約9割の学生が履修している超人気科目です。

## 2年生

### 病院実習を前に、市民の方の協力で看護演習を行いました

2年生の初めての病院実習を前に、宗像市民のボランティアの方に模擬患者になっていただき、看護援助の演習を行いました。学生同士で行う時とは全く違い、市民の方のリアルな演技にとっても緊張したのと同時に、改めて自分自身の知識、援助技術の不足を痛感しました。演習中、自分の事で手一杯で患者さんへの配慮や声かけが足りなかったようで、模擬患者さんからは「少し不安だった」との感想をいただきました。今回の模擬体験を通して得た事や模擬患者さんからいただいた言葉を振り返り、実習につなげていきたいと思います。

富園 恵美さん 鹿児島県・鳳凰高校出身



模擬患者さんへ声かけする学生

## 3年生

### ベトナム海外研修を行いました

3年生18名は、8月3日から10日まで、選択科目「国際保健・看護Ⅱ」の海外研修で、ベトナム社会主義共和国を訪問しました。

ナムディン看護大学、国や省の基幹病院、地域のクリニック等を訪問し、日本とベトナムの看護の共通と類似について学びました。その中でも印象に残っているのが「家族」と「生活」を尊重した看護のあり方です。ベトナムの人々と接する中で、あらためて人のつながりを大切にしなければならないこと、それが看護にも国際協力にも不可欠であることを実感しました。

たくさん学び・考え・感動した研修でした。

科目担当教員 小川 里美 准教授



現地看護学生との合同演習

## 大学院

### 大学院公開授業を開催しました

大学院の入学を検討している方、大学院の授業を聴講したい方、研究方法に興味のある方等を対象に「大学院公開授業」を開催し、社会人や学部生等多くの方に参加いただきました。参加者からは、「ディスカッションの中で学びを深めていく過程を見ることができ勉強になった」「講義を一方向的に聞くものだと思い込んでいたが、大学院生が批判的に論文を読んだり、論文をより良いものにするための研究計画書を発表したりする姿を見て、研究にとっても興味ももてた」等の声をいただきました。また、学習環境や日常生活の状況等について、参加者と現役大学院生が話す時間もあり、それぞれの事情に合った色々な学び方があることを分かっていただけたようです。

研究科入試委員会



公開授業のようす

## 宮城県

### 被災地を、自分の足で歩き、目で見て、心で感じたこと

訪問施設：石巻赤十字病院  
日本赤十字社宮城県支部



被災者の方へのインタビュー

東日本大震災で被災した石巻赤十字病院と日和山、仙台市の日本赤十字社宮城県支部を訪問しました。病院・支部の職員の方から直接震災直後の状況を聞いたり、被災者の方にインタビューしたりしました。石巻滞在中に実際に地震に遭遇し、改めて自然災害の恐ろしさ、そして被災地で働き続ける赤十字の職員の方たちの「心意気」を肌で感じることができました。被災地を歩き、目の当たりにし、心で感じることで、色々な思いが巡り、考えさせられることも多くありました。看護を学ぶ私たちにとって貴重な体験となり、本当に行って良かったと思いました。

糸山 美里さん 佐賀県・佐賀西高校出身

全国の赤十字病院や血液センターを訪問しました。

# 4年生

## 最後の病院実習

### 「看護の統合と実践」を終えて

九州の各赤十字病院で、これまでの学修の総まとめとなる実習を行いました。



釘本 綾美さん 佐賀県・小城高校出身

ケアだけでない「コメディネーターの専門家」としての看護師の役割

～大分赤十字病院での実習を通じて～

実習を重ねることで自分自身の成長を実感地域に貢献できる看護師に

～唐津赤十字病院での実習を通じて～

唐津赤十字病院は、私達看護学生の初めての実習となる基礎看護実習から受け入れて下さっており、とても緊張している私達を優しくほぐしてくださいました。また、最後の実習となる今回の統合実習では、時には優しく時には厳しく指導してくださいました。病院では大学で学んだ学修を最大限に生かすことが出来ました。実際は、教科書通りの看護ではうまくいかず、困惑することもありました。しかし、そんなときには、実習の担当教員をはじめ病棟看護師の方が優しくフォローしてくださいました。看護師に憧れて入学してきた私たちですが、実際に入学してからは、困難にぶつかり諦めそうになったことも多々あり

大分赤十字病院の良いところは病院内の雰囲気です。急性期病院である為、忙しいですがその中でもスタッフ同士のコミュニケーションや学生への指導も大変丁寧でした。

統合実習は、これまでの実習の集大成です。学内で学んだ看護管理や看護援助の知識・技術は大変役に立つたと思います。実際に患者さんへの看護援助をする際には看護技術が必要ですし、現場での看護師の業務を学ぶにあたっては学内での学習内容が現場での実際の看護師の役割とつながり、単に役割や業務を理解するのではなく各役割に關して理由付けを行いながら学ぶ事ができたと思います。看護師は、患者さんの心身のケアだけではなく、家族、院内環境や他の医療スタッフとの調整をしていく役割があると思います。

患者さんだけではなく看護メンバーの一員として看護師の役割を見る事ができた今回の統合実習では、看護師は患者さんの療養上の世話できるだけではなく

先輩の背中を追いかけて患者のニーズを的確にとらえ確実に応える看護師に

～福岡赤十字病院での実習を通じて～

私がこの大学に来てよかったと思えることは、実習先に自分と同じ大学で学習してきた先輩方がいて自分の理想像を描きながら実習できたことです。大学のなかだけではなく、福岡赤十字病院のような大学の外にも、自分と身近な先輩がいることで相談もしやすく、疑問に思ったことも聞けば丁寧に教えてくれました。また、赤十字の理念である「人道」をより身近に感じながら学びを深めていくことができた。大学では、演習を交えながらの講義が多いため、実習に行った際に看護技術の実践をスムーズに行うことができました。実習を重ねていく中でジレンマにぶつかったり、悩んだりしましたが、教員や指導者からの的確なアドバイスのにより、その壁を乗り越えてくる事ができました。大学に入るまでは、患者さんに寄り添うことは、その人のそばにいて話を傾聴することだと考えていました。

しかし、4年間の学習と実習を通して、寄り添う看護とは、患者さんのニーズを的確に判断し、



鎌田 真早紀さん 鹿児島県・川辺高校出身

赤十字の理念+αで貢献患者の生活や人生観を尊重した看護を

～鹿児島赤十字病院での実習を通じて～

私は大学入学時、赤十字と聞くと海外活動、災害救護活動、献血活動など活動の方が先にイメージされ、病院の印象は全くありませんでした。

しかし、赤十字病院で実習を行うっていく中で、大学4年間で学んだ赤十字の理念である「人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性」に沿い、かつ、その地域におけるニーズに合わせそれぞれ赤十字病院が担う役割を見出すことが出来ました。鹿児島赤十字病院は、リウマチを専門とする病院です。

さらに、活火山の桜島や島が多くある地でもあるため、噴火による災害での救護活動や離島診療などの特徴的な医療活動があります。地域性もあるのか患者さんも温厚な方が多く、病院ス



堤 満理奈さん

2012年卒業  
熊本県・熊本学園大学付属高校出身  
熊本赤十字病院

出会いから学び感じとることを看護へ

私は呼吸器内科・内科・皮膚科の混合病棟で働いています。

臨床では多重課題を目の前に、失敗することや人の「死」の前に、自分に何ができたのか自問自答を繰り返し落ち込むことも多くあります。しかし大学時代に学んだことが臨床現場で改めて理解でき、学生の頃漠然と抱いていた「問い」が少しずつ具体化していることに気付く時、私はまた自然と前を向いて患者さんのもとへ向かうことができました。

ふと気付くと私を見つめる患者さんのまなざしや先輩の指導の中には私がこの場で看護を学ぶ要素が多くあると感じます。

患者さんや家族、先輩看護師との出会いから学び感じとることを看護実践へ繋げ、一歩ずつ確実に看護師として成長していくことが今の目標です。

も頑張っています！



4月4日



## 新入生141名があらたに入学

学部生104名、大学院生5名、認定看護師課程研修生32名を迎え、平成25年度入学式が行われました。オーヴァルホールで行われた式典には、山崎建典福岡県副知事をはじめ宗像市、地域コミュニティ運営協議会、実習施設、学生支援団体の方々にご臨席いただきました。式後は、レストランアスティで歓迎会が開かれ、和やかな雰囲気ですべての学生がスタートしました。

4月9日・10日



## 潮風感じながら楽しく仲間づくり

1年次必須科目「人間関係論」の一環として、精神看護領域・クラス担任の教員や4年生ボランティア学生が参加し、福岡県立少年自然の家・玄海の家で「フレッシュマンキャンプ」が行われました。目隠した相手を道案内するブラインドウォーク体験や海辺での砂像づくり、グループでのマップ作成、ソフトバレー大会など盛りだくさんの内容で盛り上がりました。仲間との共同生活を通して、看護職者にとって基本となる自己理解・他己理解を深めました。

5月22日・24日



## 赤十字医療施設37カ所による合同説明会

3・4年生対象の就職活動支援行事が2日間にわたり行われました。1日目は、卒業生から就職活動や国家試験対策のポイント、現在の業務内容などについて講話があった後、37赤十字医療施設の看護部長や人事担当者による合同就職説明会が行われました。2日目は、面接指導の講師から、面接時に人事担当者がチェックしているポイントを詳しく教えていただきました。

5月30日



## 変革期における看護師の役割学ぶ

米国イリノイ州の聖アンソニー看護大学からシャノン・ライザー学部長他教員2名と学部生2名を招き、「第2回国際フォーラム」が開催されました。学部生による研究発表会に引き続き、ペギー・ワグナー教授が「米国の臨床ケア、救急サービス、搬送における看護の役割」について、ライザー学部長が「ケアプランニングにおけるAPN(Advanced Practice Nurse)の役割」について講演されました。変革の時代にあって、看護師の向上心、建設的なCritical Thinkingを持つことの大切さ、看護師の役割の可能性とそれに向けての果敢な挑戦の意義が、力強いメッセージとして伝えられました。

7月2日



## 半世紀にわたり 看護学生見守り続ける米蔵翁

福岡赤十字高等看護学院(後の福岡赤十字看護専門学校)の創設時(昭和33年)に多額の資金拠出をいただき、半世紀にわたり福岡の赤十字看護師養成に尽力くださった上田米蔵翁の命日を前に、中庭にある翁の胸像前で毎年恒例の「上田米蔵翁献花式」が行われました。梅雨の合間の青空の下、教職員、大学院生が米蔵氏の胸像を囲み、米蔵翁のご令孫で上田奨学会理事長の上田康藏氏と浦田学長が、献花を行いました。



本格的な立ち上げを目指して昨年からの準備を進めてきた「国際看護実践研究センター」の開所式が5月12日に開催されると同時に、この開所を記念して、前学長である喜多名誉学長の記念講演会が、本学のオーヴァルホールで行われました。

当日は日曜日にもかかわらず、来賓として、日本赤十字社福岡県支部河野事務局長、JICA九州国際センター勝田所長、認定NPO・国際NGO「ロシナンテス」理事長川原尚行先生他26名の方々のご出席をはじめ、本学の学部・院生121名、教職員61名、計215名の参加がありました。浦田新学長のあいさつ、五十嵐センター長の説明に続いて、喜多名誉学長から「たどるべき永き道のりー難民・紛争・開発そして看護」というテーマで約1時間の熱のこもった講演がありました。



## 本邦唯一の国際人道援助研修「H.E.L.P in JAPAN」



9月2日～9月20日の3週間にわたり、インドネシア、バングラデシュ、タイ、ネパール、コンゴ、イギリス、日本の7か国から22名の参加者を迎え、H.E.L.P.研修が行われました。

H.E.L.P.は、Health Emergencies in Large Populationsの頭文字をとって命名された赤十字の人材育成研修で、国際的人道支援活動に従事する人々に必要な公衆衛生、倫理、法律などの基盤的知識を提供し、実践力の向上を目指すものです。スイス、アメリカ、カタール、メキシコ、南アフリカでの定期開催に加え、2003年から隔年開催している日本のHELP研修も今年で6回目を迎えました。世界中ですでに3000人以上の方が研修を受け、紛争や災害によりHELP!と声なき声を上げている人々への支援活動に研修で学んだ知識や技術を活用しています。ICRC(赤十字国際委員会)のメディカルコーディネーターを務めていた講師の一人は、「災害の多いアジアからの参加者はとても熱心で、日本でのコースが一番雰囲気がい」と言います。教室ではフランス訛り、アフリカ訛り、いろいろな英語が飛び交い、和やかな雰囲気の中で皆さん、活き活きと交流を深め、知識を深めていました。

## インドネシア看護師能力強化プロジェクトに参画



インドネシアの看護師とともに研修プログラムを策定する 小川准教授(中央) 原田助教(左)

本学では、独立行政法人国際協力機構(JICA)と協働で、平成24年9月から5ヶ年にわたり「インドネシア看護実践能力強化プロジェクト」に取り組んでいます。このプロジェクトはインドネシア看護師の能力向上を目的に、インドネシア保健省やインドネシア大学など5大学が、現地中核病院と連携して実施されるものです。日本の協力機関として、本学のほか、国立看護大学校、厚生労働省、国立国際医療研究センターなどが参画し、看護師のキャリア開発に向けた教育システムや、救急、災害、老年など各看護分野における研修プログラムの導入などを支援しています。

\*これまでの派遣実績

派遣期間	指導調査・支援分野	派遣者
2013.1.27～2.2	看護運営指導調査	寺門とも子教授、小川里美准教授
2013.1.30～2.1	保健医療運営指導調査	喜多悦子前学長
2013.5.7～5.11	災害看護/救急クリティカル・ケア看護分野	山勢善江教授、増山純二准教授、濱元淳子助教
2013.5.15～5.18	キャリア開発・教育システム分野	小川里美准教授、原田紀美枝助教
2013.7.1～7.31	キャリア開発・教育システム分野	小川里美准教授
2013.9.1～9.28	キャリア開発・教育システム分野	小川里美准教授

## ランチョンミーティング 開催状況

	月日	講師		テーマ
第1回	4月18日	入来院綾乃(4年)・永富すみれ(4年) 内田安貴(4年)	本学学生	世にもユニークな国ブータン ―国際保健・看護Ⅱ海外研修報告―
第2回	4月23日	宇都宮真由子助手・熊倉 佳奈助手 苑田裕樹助手	本学教員	コロラド大学における看護教育の現状 ～看護師がHappyなら患者もHappy～
第3回	5月14日	坂田堂(4年)・規工川智美(4年) 黒田さくら(2年)	本学学生	学生ができるボランティア in カンボジア
第4回	5月29日	木田綾子氏	元青年海外協力隊員	JICAボランティアとして ～ベトナムでの看護活動～
第5回	6月18日	山勢善江教授・増山純二准教授 濱元淳子助教	本学教員	インドネシア国看護実践能力強化プロジェクト ―災害/救急・クリティカルケアに関するワークショップ開催報告―
第6回	7月12日	安田真佐枝氏	UCLAメディカル・センター 看護師	アメリカの病院での臨床、アメリカ大学院への留学
第7回	9月17日	Elena Valdivieso氏	ポリバル国立大学 保健学部看護学科 教授	エクアドルの国及び看護教育の概況

# 看護部長からのメッセージ

わたしたちと一緒に  
赤十字の未来をつくりましょう。



熊本赤十字病院  
河添 真理子 副院長兼看護部長

赤十字発祥の地である熊本は、国内外を問わず災害救援活動に力を注いでいます。

ドクターヘリの基地病院、総合救命センターとこども医療センターの新築、西日本初となる小児救命センターにも指定され、救急医療を中心に地域医療に貢献しています。

少子・高齢・多死社会の中、医療の機能分化が推し進められ、急性期においては退院までの回復過程を見守ることが困難になりました。

回復期病院、療養型施設、在宅へと「地域包括」の視点で、看護を繋いでゆかねばなりません。

昨年5月に近隣の15の医療施設と共に看護連携を立ち上げました。この仕組みで患者の転院先訪問を行い「回復の

可能性を信じて看護する」とこの大切さを実感してくれたことを嬉しく思い、継続と拡大訪問を図ります。

赤十字看護師のキャリア開発ラダー(※)レベル認定者は8割以上です。

専門職として自己研鑽を続ける職員を誇りに感じています。それに応えるべく、働きやすい職場環境をめざし、短時間夜勤やパートナースhipを導入しているところです。

変化する医療環境の中、学生時代は「学習する習慣」を身に付けて欲しいものです。

そのことが専門職としての揺るがぬ土台を作り、卒後の多様なストレスから守り、自己成長させてくれるはずです。

※段階的に設定された継続教育システム

看護職を志す皆さんへ  
「その意志が、あなたを変える、そして未来が始まる。」

大分赤十字病院は、看護職の生涯サポートプログラムを作成しています。

このプログラムは当院に就職した看護職のキャリア開発だけでなく、次世代育成から退職後のセカンドライフまでを通じて看護の喜び、感動、やりがいを伝え続けるプログラムです。次世代育成と位置付けた中学生、高校生の職業体験や看護学生の実習受け入れ

やインターンシップ等では、私達はいつも皆さんに語りかけます。「今、あなたが踏み込もうとする看護の世界は奥が深く、興味がない魅力あふれるものです。専門性の高い厳しい世界ではありませんが『あなたの意志』でその世界はより輝きを増し、感動を生むものになります。看護職として私達と一緒に感動を味わい、未来を築いていきましょう。」

写真は、育児休暇中に看護部に遊びに来たがん看護専門看護師の竹村陽子さんと副部長と私です。

専門看護師としてのキャリアと子育てとの両立を支援しています。

看護職は一生継続けられる専門職です。今を大事に多くの人とふれあい、様々な体験をしてください。その体験がきつと豊かな人間性を育みます。



大分赤十字病院  
竹中 愛子 看護部長(左)

専門分野について教育研究に従事する下記の先生方に客員教授を委嘱しています。



中村 哲先生



川原 尚行先生

スーダンで医療支援活動中の川原尚行先生からコメントが届きました！

ラマダン、陽が沈むと、家の外、皆と一緒にご飯を食べます。こんなにも口にするものがあると思える瞬間はありません。跪き額を地につけ、天に祈りを捧げます。日本人の宗教観のまま、イスラムの中にいます。

■平成24年度 決算報告 (平成24年4月1日～平成25年3月31日)

【消費収入の部】

(単位：円)

科目	予算	決算	差異	備考
学生生徒等納付金	778,050,000	757,875,000	20,175,000	学生授業料他
手数料	13,173,000	18,463,880	△ 5,290,880	入学検定料他
寄付金	5,329,000	4,466,044	862,956	寄贈図書他
補助金	105,255,000	117,551,000	△ 12,296,000	経常費補助金他
資産運用収入	15,150,000	15,232,176	△ 82,176	受取利息
事業収入	36,546,000	31,351,195	5,194,805	JICA受託事業収入他
雑収入	3,618,000	6,318,162	△ 2,700,162	科研費補助金間接経費他
内部取引	3,098,000	5,216,671	△ 2,118,671	
帰属収入合計	960,219,000	956,474,128	3,744,872	
基本金組入額合計	△ 12,768,000	△ 13,113,600	345,600	
消費収入の部合計	947,451,000	943,360,528	4,090,472	

【消費支出の部】

(単位：円)

科目	予算	決算	差異	備考
人件費	569,108,000	522,508,084	46,599,916	教職員人件費
教育研究経費	329,423,000	313,692,162	15,730,838	教育経費
管理経費	41,512,000	36,790,410	4,721,590	管理経費
資産処分差額	0	78,180	△ 78,180	教育研究用備品他の処分
徴収不能額	0	1,550,000	△ 1,550,000	
内部取引	14,008,000	16,291,391	△ 2,283,391	
消費支出の部合計	954,051,000	890,910,227	63,140,773	
当年度消費収入超過額 (又は消費支出超過額)	△ 6,600,000	52,450,301		
前年度繰越消費収入超過額 (又は前年度繰越消費支出超過額)	526,172,291	432,856,219		
翌年度繰越消費収入超過額	519,572,291	485,306,520		

研究室訪問



学生支援委員長  
姫野 稔子 教授

高齢者のフットケアを研究して12年程経ちますが、最初はこのような研究をしている研究者もおらず文献も見当たらない状況でした。そこでまず、100人の足の実態を調査して、どのような足の人が転倒しやすいかを研究・分析しました。

この研究成果の一部は昨年12月にNHK「ためしてガッテン」で紹介されたんですよ。また、結果から導いた改善策を高齢者ご本人や高齢者福祉施設の職員に伝えて実施してもらうなど、研究としての広がりが見えてきました。

学生時代からチャレンジすることが好きで、華道、茶道、コーラス、演劇、手話と日替わりで部活をしていました。先輩と研究室というとても厳しい寮生活でしたが、礼節と折れない心が身につく、社会人としての基盤、人間性を磨いてもらったと思います。

看護とは？「自分そのもの」だと思っています。相手の反応を読み取ったり普段との違いに気づいたりするのは、自分自身という道具を通してのことです。

学生時代には何事にも挑戦して、専門学芸のみならず、自分の中のしなやかさやたくましさや身を付けてほしいと願っています。

本学では、国内外の各界において特に優れた知識、技術及び経験を有し、

- ◇ 奥野 英子 / 国立大学法人筑波大学
- ◇ 神坂 登世子 / 公益社団法人 福岡県看護協会 前会長
- ◇ 斎藤 厚 / サンレモリハビリ病院 名誉院長
- ◇ 山本 保博 / 日本私立学校振興・共済事業団 東京臨海病院 院長
- ◇ 川嶋 みどり / 日本赤十字看護大学 名誉教授
- ◇ 村松 静子 / 日本在宅看護システム 代表
- ◇ 中村 哲 / NGOベシャワール会 代表
- ◇ 川原 尚行 / 認定NPO/国際NGOロシナンテス 理事長
- ◇ Pierre Perrin / 元 ICRC メディカルコーディネーター



■4月5日 西日本新聞 朝刊  
医療の礎 対話力養え  
宗像・日赤看護大  
新入生合宿スタート



■7月4日 西日本新聞 朝刊  
子宮頸がんを知ろう 大学生らの  
グループ 同じ若い世代へ「自分の体  
を大切に・・・正しい知識を伝えたい」



■7月15日 西日本新聞 朝刊  
人道支援の心を伝える  
浦田学長インタビュー

■4月5日 毎日新聞 朝刊  
「自己啓発尽くす」日赤看護大学入学式

■6月3日 西日本新聞 朝刊  
レベルファイブ日野社長 4大学連携講演会  
サークル「ゆいまーのわ」紹介

■7月18日 西日本新聞 朝刊  
ぶくおが発未来! 未来のちからvol.4  
「アジアで活躍する看護師を福岡から」  
浦田学長、西日本新聞社長対談

■9月13日 西日本新聞 朝刊  
宗像市合併10年「協働のまち」へ  
官学連携 むなかた協働大学

寄付のお願い  
本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。  
寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。  
詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。

これまで、キャンパス通信を4号まで発行し、多くの大学関係者に認知されてきました。  
そこで第5号となる本紙から、キャンパス通信に名称をつけることと致しました。



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、  
水と空が一続きになって一様に青々としていることを  
表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。  
「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、  
本紙を通じて、学生・保護者・OGOBの皆様と大学とが  
一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：3年生 吉田 歩さん／福岡県・柏陵高校出身



# 日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行 日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会  
〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地  
TEL 0940-35-7001/FAX 0940-35-7021

<https://www.jrcicn.ac.jp/>